

# 「ゆめファーム全農こうち」における なすのつるおろし栽培

つるおろし栽培は、生長点を維持しながら一定のリズムで生育させる栽培方法で、トマトでは一般的であるが、なすでは事例がほとんどない。「ゆめファーム全農こうち」（以下、当該）では、令和2年作より本格的になすのつるおろし栽培を開始し、作業の簡略化・標準化を図ることで35 t / 10 a という高収量を達成した。今号では、高収量達成の大きな要因となったつるおろし栽培について紹介する。

## つるおろし栽培による 作業の簡略化・標準化

なすは、側枝の果実が早く収穫できるため、主枝を摘芯し、側枝から連続的に収穫するのが一般的である。なすの慣行栽培では、側枝から最大10果近く収穫するため、同じ節で何度も切り戻しを行う。この作業の標準化が難しく、作業自体の煩雑性も高い。

一方、つるおろし栽培では、植物の生育状況に応じて側枝から2、3果収穫し、収穫後は側枝を根元から切り戻すため、切り戻し回数は1、2回で完了する(図1)。このように、切り戻し作業を簡略化できることが、なすのつるおろし栽培のメリットのひとつであり、特にパート従業員を雇用しながら栽培する圃場では効果を発揮する。

## 生育調査の継続が可能

つるおろし栽培では、生長点が摘芯され続ける慣行栽培とは異なり、生育調査（植物の伸長量・茎径などを測定すること）を継続できるメリットもある（図2）。生長点近傍には、

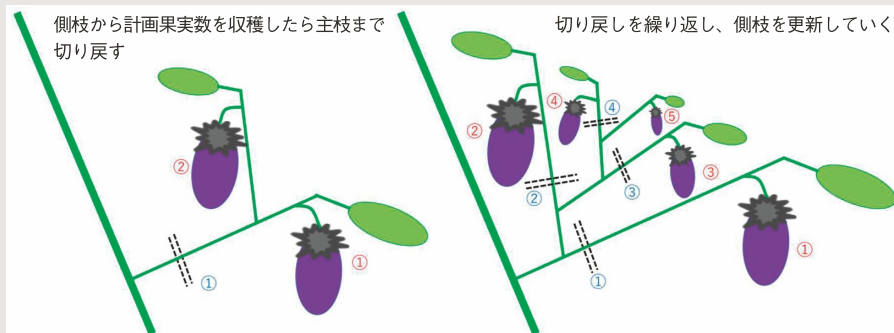


図1 側枝からの果実収穫イメージ図(左：つるおろし栽培、右：慣行栽培)  
(赤数字：側枝からの収穫果数、青数字：側枝での切り戻し回数)



写真1 なすハイワイヤーつるおろし栽培の様子

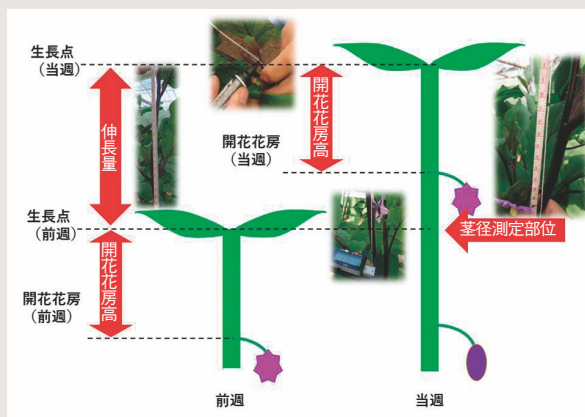


図2 生育調査イメージ

植物の生育状況に関する情報が詰まっており、茎径、開花位置、伸長量などの推移から、現在の植物状態を数字で評価することができる。つるおろし作業は、植物にとって少なからずストレスではあるが、植物状態を把握し、天候を考慮した上でつるおろし作業を行うことにより、植物の草勢を維持しながら栽培することが可能である。

## つるおろし栽培のポイント

つるおろしは、一度に長くおろすと草勢が弱りやすいため、植物状態や天候に応じておろす長さを調整することが重要である。また、なすの茎は、硬く折れやすいため、栽培初期から進行方向へ癖付けすることで、茎折れリスクを低減させることが可

能となる。つるおろしは回数を重ねることで進行方向への癖付けが自然と行われるため、つるおろしをすればするほど作業効率は良くなる。



「ゆめファーム全農こうち」では、なす栽培の経験がほとんどないパート従業員でも習熟しやすく均一な作業ができる仕組みづくりをめざしている。作業の簡略化・標準化を進めることで、これまで課題であった繁忙期における労働力不足の解消や、生産現場でのパート従業員を雇用することによる規模拡大が可能になると考えている。今後は協力関係先と連携しながらさらなる技術改良・普及を進め、農業振興および施設園芸の発展に貢献していきたい。

【全農 耕種総合対策部 高度施設園芸推進室】